

日本語の直接受身文とビルマ語における対応表現
—夏目漱石『坊っちゃん』を資料として—

小野寺 潤

1. はじめに

日本語や英語など多くの言語で受身文 (Passives) が用いられており、受動態 (Passive voice) という文法カテゴリーの存在が認められている。(1, 2) に示すように、受身文では対応する能動文の目的語が主語に「格上げ」され、典型的には接辞付加により動詞の語形が変化する。また、対応する能動文の主語は受身文では主語以外に「格下げ」されたり、文中に現れなくなる。

- (1) a. 鈴木先生が太郎に話しかけた。 (能動文)
b. 太郎は鈴木先生に話しかけられた。 (受身文)
- (2) a. John kissed Mary. (能動文)
b. Mary was kissed by John. (受身文)

日本語では能動文の動詞の語幹に助動詞“-rareru”が付加し、英語では能動文の動詞を過去分詞にして、その前に **be** 動詞を置く。また、類型論的には受身文は「①動作主を背景化する機能、②被動者を前景化する機能、③従属節と主節の主語を統一する機能」を持つとされる (倉部 2013: 65)。

しかし、さまざまな言語においてどのような構文を「受身文」とするかは自明ではない⁽¹⁾。さらに、ある言語において可能な受身文のタイプが別の言語では必ずしも同様の形式で表されるわけではない。たとえば、日英語の対照においては、後述する日本語の間接受身文にあたる形式が英語には基本的に存在しない (例: 私は彼女に泣かれた。/*I was cried by her.)。また、ビルマ語においては、「受身的な意味を表す形式」は存在するが、厳密な意味での受動態は存在しないと考えられる。

このような受身文に関わる言語間の差異を記述し、その仕組みを明らかにすることは、言語の記述を精緻化して言語理論にも貢献する事実を明らかにするとともに、言語教育や翻訳にとっても有益であると考えられる。本稿では、ビルマ語話者に対する日本語教育の基盤となることを見据えた日本語とビルマ語の対照研究の一環として、日本語の直接受身文に対応するビルマ語の表現の実態の記述と両言語の比較を行う。ここでは、夏目漱石『坊っちゃん』(新潮文庫)の第一章から第七章 (pp. 5-90) に現れる直接受身文の用例を収集

し、Ye Mya Lwin [yé myá lwín] によるビルマ語訳における対応表現との比較と分析を行う。それにより、日本語の直接受身文がビルマ語への翻訳ではどのように表現されているか明らかにする。

2. 日本語の受身文

2.1. 日本語の受身文の分類

日本語の受身文の分類にはさまざまなものがあるが、ここでは、日本語記述文法研究会編 (2009) (以下、『現代 2』とする) に従って日本語の受身文の分類を行う。日本語の受身文は、大きく①直接受身文 (Direct passives)、②間接受身文 (Indirect passives)、③持ち主の受身文 (Possessive passives) の3つのタイプに分けられる。

2.1.1. 日本語の直接受身文

直接受身文とは、(3) のように、「対応する能動文において、ヲ格名詞やニ格名詞など、文が表す事態の成立に直接的に関わっている人や物を主語として表現する受身文 (『現代 2』:215)」である。対応する能動文の動詞は他動詞のみである。また、能動文における能動主体は直接受身文では「に」で表されるのが基本であるが、「によって」、「から」などで表されることもある (『現代 2』:218)。

- (3) a. 鈴木先生が太郎をほめた。 (能動文)
b. 太郎が鈴木先生にほめられた。 (受身文)

2.1.2. 日本語の間接受身文

間接受身文とは、(4) のように、「対応する能動文の表す事態には直接的に関わっていない人物を主語とし、話し手がその人物と事態を主観的に関係づけ、事態から何らかの影響を被^{こうむ}っていることを表現する受身文 (『現代 2』:236)」である。間接受身文の主語は対応する能動文には含まれない項であるため、間接受身文では名詞句の数が対応する能動文より1つ増えることになる。また、能動文における能動主体は間接受身文では「に(は)」で表され、「によって」、「から」、「で」は用いられない (『現代 2』:237,238)。基本的に、間接受身文では主語で表される人物が「迷惑」を感じている場合が多い。

- (4) a. 太郎がいい点数を取った。 (能動文)
 b. 私は太郎にいい点数を取られて悔しかった。 (受身文)

間接受身文の主語は対応する能動文に含まれている必要がないので、間接受身文では他動詞だけでなく (5b) のように目的語を持たない自動詞が用いられる場合もある。

- (5) a. 電車の中で子どもが泣いた。 (能動文)
 b. 鈴木先生は電車の中で子どもに泣かれて困ってしまった。 (受身文)

基本的に間接疑問文では能動主体は有情物であり、(6a) に示すように無情物を能動主体とする間接受身文は一般的に不自然である。しかし、能動主体が「雨」や「風」などの自然現象である場合は、(6b) のように例外的に無情物を能動主体とした間接受身文が自然となることがある。

- (6) a. *鈴木先生は、家に帰る途中で雷に鳴られた。
 b. 鈴木先生は、家に帰る途中で雨に降られた。

2.1.3. 日本語の持ち主の受身文

持ち主の受身文とは、(7) のように、「対応する能動文のヲ格名詞やニ格名詞などの表す物の持ち主を主語として表現する受身文 (『現代 2』: 242)」である。対応する能動文における能動主体は持ち主の受身文ではおもに「に」で表されるが、「によって」で表されることもある。また、対応する能動文のヲ格名詞やニ格名詞は、持ち主の受身文ではそのままの格で表される。

- (7) a. 鈴木先生が太郎の名前を呼んだ。 (能動文)
 b. 太郎は鈴木先生に名前を呼ばれた。 (受身文)

2.2. 有生性による直接受身文の下位タイプ

直接受身文を主語と能動主体を表す補語の有生性 (Animacy) によって分類すると、以下の4つのタイプに分けることができる (奥津 1989: 124, 125)。なお、有情物 (Animate entity)

を「+」で示し、無情物 (Inanimate entity) を「-」で示す。

- (8) a. [++] 型: 太郎は 鈴木先生に 励まされた。
b. [+ -] 型: 太郎は テストの直前 不安に 襲われた。
c. [- +] 型: テストは 鈴木先生によって 作成された。
d. [- -] 型: 大事な答案が 風に 飛ばされた。

(8a, b) の [++] 型と [+ -] 型の直接受身文は「有情の受身」と呼ばれ、使用頻度が高く無標 (unmarked) の受身文であり、(8c, d) の [- +] 型と [- -] 型の直接受身文は「無情の受身」と呼ばれ、使用頻度が低く有標 (marked) の受身文である。

3. ビルマ語の「受動表現」

3.1. ビルマ語の概観

ビルマ語 (Burmese) はおもにミャンマー連邦共和国で使用されている言語で、チベット語などとともにシナ・チベット語族 (Sino-Tibetan)、チベット・ビルマ語派 (Tibeto-Burman) に属する言語である。ビルマ語と日本語との系統関係は立証されておらず、両言語の使用地域は地理的に大きく隔たっている。しかし、(9, 10) の例文が示すように、日本語とビルマ語の基本語順はともに SOV であり、名詞に後置詞を付加して格標示を行い、修飾語句が被修飾語句の前に、従属節が主節の前に、関係節が名詞句の前に置かれる。このように、ビルマ語は多くの点で日本語と文法的によく似た特徴を持っていると言える。

- (9) kò wìn gâ pánqí gò sá dè.
コー・ウィン が リンゴ を 食べる 叙実
「コー・ウィンがリンゴを食べた。」

- (10) di nê zé tʷá yìn mánêgâ gǎdínzà hmà twê dē
この 日 市場 行く なら 昨日 新聞 で 見る 連体
leʔshwéʔeiʔ kò wè gê mè. (藪 2009: 178)
手揚げかばん を 買う 移動 叙想

「今日市場へ行ったら、昨日新聞で見た手提げかばんを買ってくるだろう。」

3.2. ビルマ語の“?ă-V khàn (yâ)”構文

しかしながら、ビルマ語が日本語とは異なる特徴を持つ文法現象も存在する。その例として、受身に関わる現象があげられる。ビルマ語で受身の意味を表す言語形式として、(11)の例文に示す“?ă-V khàn (yâ)”構文がある(岡野 2009; 倉部 2013) (2)。

- (11) òù ?ă-yai? khàn yâ dè. (倉部 2013: 27)
彼 殴り 受ける 不可避 叙実

「彼は殴られた (彼は殴りを受けなければならなかった)。」

この文においては、名詞句“òù” (彼) が主語であり、動詞“yai?” (殴る) に名詞化接頭辞“?ă-”を付加することで名詞化された名詞句“?ă-yai?” (殴り/殴打) が動詞“khàn” (受ける/被る) の目的語となっている⁽³⁾。助辞“yâ” (～なければならぬ [不可避]) が用いられることが多いが、必須ではない。以上のことからわかるように、ビルマ語の“?ă-V khàn (yâ)”構文は基本的に受身文に相当する意味を持つてはいるが、厳密に言うとは形式的には他動詞能動文である。また、“?ă-V khàn (yâ)”構文は「基本的に被害の意味を表す(岡野 2007: 130)」とされ、「この構文の主語に立つことができるのは人間名詞句のみである(倉部 2013: 31)」。さらに、倉部 (2013) はこの構文が類型論的に諸言語の受動構文に見られる、「①動作主を背景化する機能、②被動者を前景化する機能、③従属節と主節の主語を統一する機能」を欠いていることを指摘している(倉部 2013: 65)。また、岡野 (2007) によれば、この“?ă-V khàn (yâ)”構文は自然な会話ではあまり用いられず、「通常は目的語を文頭に持ってくれば、それで受身的な意味を帯びる(岡野 2007: 130)」としている(例: ?ăphè òù qò shù dè. 「父が私を叱った。」→ òù qò ?ăphè shù dè. 「私を父が叱った。/私は父に叱られた。)。これらの事実から、“?ă-V khàn (yâ)”構文は厳密には受身文ではないと判断されることに加え、日本語や英語などの言語における受動態に対応するヴォイスの形式をビルマ語は欠いていると見ることもできる。

4. ビルマ語訳『坊っちゃん』における受身に対応する表現の分析

夏目漱石『坊っちゃん』（新潮文庫）の第一章から第七章（pp. 5-90）より、動詞語幹に助動詞“-rareru”が付加してできた受身文を収集し⁽⁴⁾⁽⁵⁾、意味的観点と構文的観点からそれらの受身文をそれぞれ直接受身文、間接受身文、持ち主の受身文の3種に分類した⁽⁶⁾。その結果、収集された受身文の用例の総数は58例で、そのうち直接受身文が39例、間接受身文が15例、持ち主の受身文が4例であった。

この『坊っちゃん』一～七章の日本語原文に現れる39例の直接受身文に対応する箇所のビルマ語訳の表現を分析すると、①“?ă-V khàn (yâ)”構文、②能動文、③意訳または訳出なしの3通りに訳されていることがわかった。以下、本節では、2.2.で示した有生性による直接受身文の下位タイプごとに、日本語の受身文とそのビルマ語における対応表現を比較し分析していく。

4.1. [++] 型直接受身文

主語と能動主体を表す補語がともに有情物である[++]型直接受身文は受身文のなかでも最も使用頻度が高いもので、話し手が動作主を表す名詞句と対象を表す名詞句のどちらにも視点を置くかにより、能動文が選択されたり受身文が選択されたりする（『現代2』：226；奥津1989：124, 125）。『坊っちゃん』一～七章に現れる[++]型直接受身文は33例あり、そのうちビルマ語訳では①“?ă-V khàn (yâ)”構文に訳されているものが13例（39.4%）で3分の1以上を占め、②能動文で訳されている例が5例（15.2%）と少なく、③意訳または訳出なしが半数近い15例（45.5%）もあった。

4.1.1. “?ă-V khàn (yâ)”構文に訳されている例

(12) a. （口惜しかったから、兄の横っ面を張って）大変叱られた。（p. 8）

b.	thósàn	?ātáin	cou? pé	?ă-shù	khàn	?ă-céin	khàn
	いつもの	ように	おれ だけ	叱り	受ける	どなり	受ける
	dà	pô	byà.				
	の	当然	語気				

「いつものように、おれだけ叱られ、どなられたのだ。」

(13) a. 先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥の差だ。(p. 30)

- b. shāyà lô khò yâ dà nê shāyà lô ?ā-khò khàn
先生 と 呼ぶ 不可避 の と 先生 と 呼び 受ける
yâ dà hà ?ādō-ji kwájá dè.
不可避 の は かなり 違う 叙実
「先生と呼ぶのと呼ばれるのはかなり違う。」

(14) a. (鎌倉の大仏を見物した時は) 車屋から親方と言われた。(p. 34)

- b. lànchágāmá tã-yau? kâ le?lāmá shāyà lô ?ā-thin
人力車の車夫 一人 から 大工 専門家 と 思い
khàn yâ bú dè.
受ける 不可避 経験 叙実
「人力車の車夫の一人から大工だと思われたことがある。」

(15) a. バッタは^{たた}擲きつけられたまま蚊帳へつらまっている。(p. 46)

- b. hnàngaun dwè gâ lé ?ā-yai? khàn yâ đī
バッタ たち は も 叩き 受ける 不可避 連体
dàin mā t̄è bé chindaun thé hmà hò pyé ka?
ながら否定 死ぬ まま 蚊帳 なか に あちらへ 逃げて くつつく
lai? di pyé ka? lai? lou? nè jâ dè.
適切 こちらに 逃げ くつつく 適切 する いる 複数 叙実
「バッタたちも叩かれながらも死なずに、蚊帳の中であつちに逃げてはくつつき、こつちに逃げてはくつつきしていた。」

(16) a. ほめられるおれよりも、ほめる本人のほうが立派な人間だ。(p. 50)

- b. ?ā-chí-?ā-mún khàn yâ dè cou? the?
ほめ 受ける 不可避 連体 おれ より
chímún dè kàyágànein kò gâ múnmya? t̄è.
ほめる 連体 本人 自身 が 価値がある 叙実
「ほめられるおれより、ほめる本人自身が価値がある。」

- (17) a. 攻撃されても仕方がない。(p. 87)
- b. wèphàn tai?khai?chìn khàn yâ dà hà lé
 批判 攻撃 受ける 不可避 の は も
 dāgèdō ḡābāwā cā bà dè.
 本当は 自然だ 丁寧 叙実
 「批判や攻撃をされるのも当然です。」

4.1.2. 能動文に訳されている例

- (18) a. おやじには叱られる。(p. 12)
- b. ?āphè gā shù mè.
 父 は 怒る 叙想
 「父は怒るだろう。」
- (19) a. 清には菓子を買う、時々賞められる。(p. 12)
- b. kiyò gā mòun wè cwé mè chímún mè.
 清 は 菓子を 買う おごる 叙想 ほめる 叙想
 「清はお菓子を買っておごってくれるし、ほめてくれる。」
- (20) a. 然しだれがしたと聞かれた時に、しり込みをするような卑怯な事は只の一度も
 なかった。(p. 48)
- b. dābèmé bègù nau? tà lé lô mé yìn dō
 しかし 誰 いたずらする の か と 尋ねる なら ば
 tākhà hmā mā lèin gē bú bú.
 一回 も 否定 うそをつく 過去 経験 否定補助
 「しかし、誰がいたずらしたのかと尋ねたならば、一回もうそをついたことは
 なかった。」

4.1.3. 意識または訳出なしの例

- (21) a. (その時はもう仕方がないと観念して先方の云う通り)
勘当される積りでいたら…。(p. 8)

b. cou? lé sún jìn yìn sún pó lé.

おれ も 捨てる願望 なら 捨てる当然 高圧

bà ta? nàin hmà lé lô nè pi? lai? tè.

何が できる可能 の か と いる 断行 適切 叙実

「おれも捨てたいなら捨てろ、何もできないと、思い切ってしまった。」

(22) a. 茶代をやらないと粗末に取り扱われると聞いていた。(p. 22)

b. le?shàun mã kán yìn dō phyi?tālò nè yá

おみやげ 否定 手渡す なら ば なるがままに いる 不可避

hmà tējà dē.

のは 確かだ 叙実

「おみやげを渡さなければ、なるがままになってしまうのは確かだ。」

(23) a. そんなことで見せびらかされるおれじゃない。(p. 57)

b. ?ā-hmán dō cou? hà di lou?hán dwè gò tēi? pyí

本当 は おれ は この 行動 複数 を あまり こたえない

sei? wínzá hlá dà mã hou? phú.

興味を持つ の 否定 そうだ 否定補助

「本当はおれはこんな行動をされてもあまりこたえないし、興味もない。」

(24) a. 君は乱暴である下宿で持て余されているんだ。(p. 77)

b. lūdō ?ā-shò ?āyè maunyìn hà tēi? yàinzàin lô

彼ら 声明 によれば 君 は とても 野蛮だ と

?ā-tù nè lô mã phyi? phú dē.

一緒に 住む こと 否定 なる 否定補助 伝聞

「彼らの言い分では、君はとても野蛮だということで、いっしょに住むことができないそうだ。」

4.1.4. 小結

以上、[++]型直接受身文のビルマ語での対応表現を見てきた。(12)の“?ā-shù khàn

ʔǎ-céin khàn” (叱られ、どなられる) のように「被害」の意味を持つものもあるが、(16) の “ʔǎ-chi-ʔǎ-mún khàn yǎ” (ほめられる) のように「受益」の意味を持つものもある。同じ動詞であっても、「叱られる」は (12) では “ʔǎ-V khàn (yǎ)” 構文で訳されているが、(18) では能動文となっており、「ほめられる」も、(16) では “ʔǎ-V khàn (yǎ)” 構文、(19) では能動文となっている。この (18) と (19) は、(25) に見るように連続した箇所である。

(25) a. おやじには叱られる。兄とは喧嘩をする。清には菓子を買う、時々賞められる。

b.	ʔǎphè	gá	shù	mè.	ʔǎkò	nê	yàn	phyiʔ	mè.
	父	は	怒る	叙想	兄	と	ケンカ	なる	叙想
	kiyò	gá	mòun	wè	cwé	mè	chímún	mè.	
	清	は	菓子	買う	おごる	叙想	ほめる	叙想	

ここでは、それぞれの文の文末 (“shù mè,” “phyiʔ mè,” “wè cwé mè,” “chímún mè”) を助辞 “mè” で終わる能動文で揃えるという文体上の理由のために “ʔǎ-V khàn (yǎ)” 構文の使用が避けられていると考えられる。また、日本語の直接受身文で使われた動詞に対応すると考えられる動詞を用いずに別の語や表現で意識した例や、日本語の直接受身文で表された内容がビルマ語では表現されていないと思われる「訳出なし」の例も数多く見られた⁽⁷⁾。

4.2. [+] 型直接受身文

[+] 型直接受身文は (26) の 1 例のみと少なく、ビルマ語訳の対応する箇所では “ʔǎ-V khàn (yǎ)” 構文を用いて訳されている。この例は奥津 (1985) では「潮風がおれに吹く」という他動詞能動文が対応しているとしており、本稿でもその分析に従った⁽⁸⁾。日本語の [+] 型直接受身文は対応する能動文の形で使われることはあまりなく、受身文のほうが好まれる (『現代 2』: 232, 233 ; 奥津 1989: 124, 125)。

(26) a. (ひろびろとした) 海の上で、潮風に吹かれるのは葉だと思った。(p. 58)

b.	piɲè	dé	hmá	shá-ŋwê	pá	dê	lè	ʔǎ-taiʔ	khàn	yá	dá
	海	なか	で	潮	含む	連体	風	吹き	受ける	不可避	の
	cánmáyé	ʔǎtweʔ	káun	dê	ló	cá	bú	thá	dè	mǎ	
	健康	ために	いい	叙実	と	聞く	経験	である	叙実	否定	

hou? lá.
そうだ 疑問

「海の中で潮風に吹かれるのは健康のためにいいと聞いてあったではないか。」

4.3. [-+] 型直接受身文

[-+]型直接受身文も数は少なく、(27-29) の3例のみである。前述したように、“?á-V khàn (yâ)”構文の主語に立つことができるのは人間名詞句のみであるため、“?á-V khàn (yâ)”構文を用いて訳されている [-+] 型直接受身文はない。(27, 28) の2例が能動文を用いてビルマ語に訳され、(29) の1例が意識によって訳されている。

(27) a. 人参がみんな踏みつぶされてしまった。(p. 7)

b. ?ápin nê dwè ?álóun cémwá t̄wá dà p̄.
植物 若い 複数 みんな 砕ける てしまう の 当然
「苗が全部砕けてしまった。」

(28) a. 単純や真率が笑われる世の中じゃ仕様がな。 (p. 69)

b. yóá phyúzín hmù t̄ei?sá eí hmù gò hmá
正直な 純真な こと 誠実 ある こと を こそ
eáunpyáun yimó ta? cā dē lógáji shò dō
カラカラと 声をあげて笑う 習得 複数 連体 世界 言う ば
cou? lé bà hmá mā ta? nàin bú p̄.
おれ も 何 も 否定 できる可能 否定補助 当然
「正直で純真なことや誠実さをカラカラと声をあげて笑う世界だと言うなら
おれも何もできない。」

(29) a. 別段おれは笑われる様な事を云った覚はない。(p. 68)

b. cou? pyó dē ?áthé hmá yizāyá lé t̄ā-louín hmá
おれ 言う 連体 なか に おもしろいこと も 一つ も
mā p̄a bà bú.
否定 含む 丁寧 否定補助

「おれが言ったことのなかにおもしろいことは一つも含まれていません。」

4.4. [ー] 型直接受身文

[ー] 型直接受身文の例は (30, 31) の 2 例のみである。4.3.の [ー+] 型直接受身文と同様に、“ʔǎ-V khàn (yâ)”構文の主語に立つことができるのは人間名詞句のみであるため、“ʔǎ-V khàn (yâ)”構文を用いて訳されている [ー] 型直接受身文はない。(30) では「掻き分けられる」に相当する語句はなく、訳出なしと判断される。(31) では「揺られる」という意味を動詞“pólomyó” (プカプカ浮いて流れる) が語彙的に持つ意味が担っており、意識が用いられていると考えられる。

(30) a. ジュと音がして艀の足で掻き分けられた浪の上を (揺られながら

^{ただよ}
漑っていった。) (p. 65)

b. sígǎre? sà éégǎné myiṭwá pí khānâtāpyou? yè pò
タバコ くず シャーと 音を立てる して ちょっとの間 水 上
hmà pólomyó nèyà gâ hláin ʔau? kò myou? ṭwá
で プカプカ浮いて流れる 場所 から 波 下 を 沈む てしまう
dô dè.
やがて 叙実

「吸殻がシャーと音を立てて、ちょっとの間水の上を
(ゆらゆら流れた場所の波の下にやがて沈んでしまった。)」

(31) a. 掻き分けられた浪の上を揺られながら ^{ただよ}漑っていった。 (p. 65)

b. pólomyó nèyà gâ hláin ʔau? kò myou? ṭwá
プカプカ浮いて流れる 場所 から 波 下 を 沈む てしまう
dô dè.
やがて 叙実

「ゆらゆら流れた場所の波の下にやがて沈んでしまった。」

5. まとめ

本稿では、夏目漱石『坊っちゃん』一～七章に現れる直接受身文とそのビルマ語における対応表現の用例を収集し、比較を行った。収集された39例の直接受身文の84.6%にのぼる33例が有情の受身である[++]型直接受身文であったが、その[++]型直接受身文のうち13例(39.4%)が“?ǎ-V khàn (yâ)”構文であり、能動文で訳されるものは5例(15.2%)と少なく、意識や訳出なしと判断される例が15例(45.5%)と多いということがわかった。[+-]型直接受身文は1例のみで、“?ǎ-V khàn (yâ)”構文を用いて訳されている。無情の受身となる[-+]型や[--]型直接受身文は、“?ǎ-V khàn (yâ)”構文の主語が人間名詞句に限られるという制約のためにこの構文を用いて訳される例はなく、多くは意識を用いて表現される傾向がある。

調査できた用例は少ないが、日本語の受身文を、厳密な意味では受動態とは言えないが受身的な意味を表す“?ǎ-V khàn (yâ)”構文を用いてビルマ語に訳す割合は高くはないことが明らかになった。日本語とビルマ語がさまざまな点で非常に類似していることを考えると、受身文はビルマ語を母語とする日本語学習者にとっては習得がむずかしい文法項目の一つとなっている可能性がある。また、本稿の調査では、受身文のタイプによって使用頻度がかかなり異なっていた。加えて、日本語の受身文とビルマ語の“?ǎ-V khàn (yâ)”構文のようにいわば「機械的」な対応関係がある表現もあるが、意識によって学習／翻訳対象言語の表現の意味を表さざるを得ない場合も多くあり、このことが言語教育／学習や翻訳に影響を与える可能性がある。

ビルマ語話者への日本語教育を視野に入れた日本語とビルマ語の対照研究のために、受身文に関するさらなる研究が必要となる。文法項目の使用頻度や習得の難易度の違いが明らかになれば、学習の各段階で学ぶ項目の選択や効果的な学習の順序に新たな示唆を与えることができる可能性がある。今後の課題として、直接受身文だけでなく間接受身文や持ち主の受身文も含めた日本語の受身文とそのビルマ語での対応表現の調査をさらに進めるとともに、日本語とビルマ語のそれぞれの言語において、文脈や動詞の意味、項となる名詞句の性質などから、どのような表現が選択される傾向があるか解明することが必要となる。

付記

日本語用例の収集に際し、学習院大学大学院生江口匠君（人文科学研究科日本語日本文学専攻博士前期課程2年）および同学部生薛婷堯さん（国際社会科学部国際社会科学科1年）にご協力いただいた。また、ビルマ語の用例の記述に関し、石川和雅氏（ビルマ史研究者）にご協力とご助言をいただいた。中島平三先生には重要な文献の存在をご教示いただき、快く貴重な蔵書をお貸しいただいた。ここに記して心より感謝申し上げる。

本稿における「ビルマ語」とは、基本的に現代ビルマ口語ヤンゴン・マンダレー方言を指す。本稿におけるビルマ語の表記は基本的に加藤 (2008) の「加藤式表記法」に従う。

注

- (1) たとえば、Siewierska (1984) を参照。
- (2) ビルマ語の“?ǎ-V khàn (yâ)”構文は日本語の「迂言的な受身表現」（例：「許可を受ける」「批判を浴びる」）と形式的にはきわめて類似していると言える。
- (3) 典型的には“khàn”の目的語名詞句は“?ǎ-V”で表されるが、ほかの手段で名詞化される場合もある。
- (4) 助動詞“-rareru”には受身のほかに尊敬、可能、自発の意味があり、“-rareru”が付加して作られる表現が上記のどの意味に当てはまるか判定することは容易ではなく、判断が分かれる場合もある。したがって、本稿で受身と判断された表現が、ほかの研究では尊敬、可能、自発に分類されている例もある。
- (5) 本稿では、慣用句と判断された受身文の例（「あつけに取られて、眼をパチパチさせた。(p. 53)」など）は調査から除外した。
- (6) 注 (4) ととも重なるが、受身文と判断された表現が、直接受身文、間接受身文、持ち主の受身文のいずれに分類されるかも自明ではなく、奥津 (1985) や林 (1995) などの『坊っちゃん』の受身文を扱った先行研究と異なる分類となった例もある。
- (7) 全体として、この翻訳者は語（句）と語（句）の一対一の対応よりも、全体の意味を自然なビルマ語で伝えることを重視した翻訳方略をとっている印象がある。
- (8) 奥津 (1985: 107) は『雨に降られる』と同じ型の間接疑問文ではないかという疑問もあるであろう」と指摘している。

参考文献

- 岡野賢二 (2007) 『現代ビルマ（ミャンマー）語文法』国際語学社，東京。
- 岡野賢二 (2009) 「ビルマ語の受動表現に関する覚え書き」(『語学研究所論集』第14号, 125-40, 東京外国語大学語学研究所，東京.)
- 奥津敬一郎 (1985) 「日本語と英語の受身文—『坊っちゃん』の分析—」(『日本語学』第4巻第7号, 105-115, 明治書院，東京.)
- 奥津敬一郎 (1989) 「受身文」(井上和子編『日本文法小事典』120-125, 大修館書店，東京.)
- 加藤昌彦 (2008) 「ビルマ語発音表記の一例」ms.
- 倉部慶太 (2013) 「ビルマ語の受動構文」(『地球研言語記述論集』第5号, 27-71, 総合地球環境学研究所，京都)
- 日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法 2：第3部 格と構文，第4部 ヴォイス』くろしお出版，東京。
- 藪史郎 (2009) 「ビルマ語」(梶茂樹・中島由美・林徹編『事典 世界のことば141』178-181, 大修館書店，東京.)

林綺雲 (1995) 『坊っちゃん』に見る受動表現についての一考察」(『言語文化と日本語教育』第9号, 73-86, お茶の水女子大学日本言語文化学会, 東京.)
Siewierska, Anna (1984) *The Passive: A Comparative Linguistic Analysis*, Croom Helm, London.

言語資料

夏目漱石 (1906/1950) 『坊っちゃん』(新潮文庫, 2015年12月5日155刷), 新潮社, 東京.
Ye Mya Lwin [yé myá lwín] (translated in Burmese) (2014) *Botchan* [bôcàn], originally written in Japanese by Soseki Natsume, Maung Taung Sar Pay Publishers, Yangon.